

論文

発語における「いま」－「動詞－た」について－

The ‘-ta’ indicates a change of awareness in the present moment

長友 文子

国際学生部門

「外国語としての日本語」を学ぶ留学生は、「動詞－た」文型を学ぶが、以後も誤文が多い。母語の時間表現形式が多様であることによるが、「－た」自体にも、過去や完了では分かりにくい多様な用法がある。本稿では、発語における「いま」に注目して、「－た」を統一的に理解し直し、「－た」の多様性と日本語独自の時間表現感覚を身につけさせる教え方を提案したい。

キーワード：「動詞－た」、外国語としての日本語、「－た」の用法、発語の「いま」

1. はじめに

外国語を学ぶ学習者、特に留学生のように、母語はもちろん人によっては複数の言語に習熟し、知見も知的好奇心も高い学習者にとっては、文法が学習のための重要な手がかりとなる。第一言語（母語）との文法の違いを知ることなしには、効果的な学習成果を挙げることは難しい。その点で、外国語としての「日本語」の教育は、第一言語（母語）についての「国語」教育とは異なっている。

ところが、母語が同じ学習者に対する「外国語」教育の場合とも違って、日本語教育の場面では多様な母語をもった学習者が共に学ぶことが多く、教員は、それらの母語の全ての文法に通じていることは不可能で、学習者に母語との文法の違いを示すことが難しい。

もうひとつ、日本語教育には、「国語」教育におけるような統一的な学校文法がない、という問題もある。

例えば、学校文法では、「書く」という動詞は「5段活用動詞」と呼ばれ、辞書にもそのように出ているが、世界中に日本語教育が広がり、本国で初級を学んでから日本へ来た留学生のクラスでは、初級の教科書の違いによって、それを「Iグループ動詞」、「u動詞」、「五段動詞」と学んだ学生が混在する。「子音動詞」、「強変化動詞」などと学んだ学生もいるかもしれない。もちろん、問題は動詞の活用タイプを学ぶことであって、呼び名にこだわる必要はないが、しかし、多様な学習者がいるクラスでは、文法用語についても注意が必要となる。

日本語教育にも、国語教育と同様な統一した文法体

系が必要だということではないし、外国語としての「日本語」教育も、日本語母語話者が対象である「国語」教育と同じく学校文法を規範とすべきだ、というのでももちろんない。どんな学校でも基本的に同じ学校文法を学び、また、大抵の辞書がそれを踏まえているということは、国語教育の大きな利点であるが、橋本文法を基礎とする学校文法については批判も多く、そのまま日本語教育に持ち込むことには問題がある。

近代日本の文法理論もまた、欧米の理論を学びそれを日本語用に作り変えることで発展してきた。橋本文法以後、様々な文法理論が新たに提唱されてきたが、中でも時枝文法や三上文法など、革新的な文法理論では、日本語の文法構造を、欧米の理論に寄りかかることなく、日本語を日本語として捉えなおそうという基本姿勢が強い。そしてそれは、多様な外国語話者の視点を受け止め、日本語を「外国語」のひとつとして相対化する「日本語」教育の姿勢でもある。

寺村秀夫が、73年に、次のようにいったのもそのことである。以下少し長いが引用する。

「～たとえば 'Past tense' とか 'Passive (voice)' とかを使って、『～シマシタ』とか『～サレタ』というような形式の用法を説明するとき、その相手が英語国民である場合はともかく（その場合だって大いに問題はあがる）、たとえばタイやインドネシアや南米やフィンランドからの留学生である場合、彼らがそれらの用語を聞いて－知っている－と仮定して－それぞれ頭に思い浮かべる内容が

一様のものだという保証はどこにもない、否むしろまちまちである上に、その内容たるやはなはだばく然としたものであるのがふつうだということである。

上のことは、～カタカナで書かれて、いかにも西洋直輸入であることがあらわな用語の場合に限ったことではない。『主語』『修飾』『動詞』『助動詞』等々、ひんばんに使われる日本文法の用語の大部分が、元を正せば西洋産なのだということを、われわれは片時も忘れてはならないと思う。」(寺村,1973)

こうした姿勢から、日本語教育では、時枝文法や三上文法なども含め、研究世界での議論が積極的に教育現場に導入されてきた。学校文法の制約がないことは、そのような相互フィードバックを容易にできたといえよう。ただ、学習者から見れば、そのことと引き換えに、先に見たように動詞の活用タイプの名称すらまちまちであるという事態が引き起こされている。

教科書だけではない。最近の留学生は、ほとんどが電子辞書やスマートフォンを机に置いて受講しているが、辞書もまた学校文法に準拠することが一般的であるので、留学生たちを困らせる場合がある。例えば、「明日晴れたら」の「たら」は、日本語教育では、条件、仮定を表す文型として「晴れると」「晴れば」と並べて学ぶことが多いが、留学生が辞書をひいても、一部の辞書を除いて、このような「たら」は見出語にはない。学校文法や辞書では、「たら」は助動詞「た」の活用形だからである。

以上のことを踏まえて、本論では、文法研究と教育現場の関係に配慮しつつ、「動詞-た」という語形について考察する。

なお、学校文法で助動詞「た」といわれる語は、単純な形では、次のような対比関係の中で使われる。

- ① 雨が降る 雨が降った (動詞-た)
- ② 雨だ 雨だった (名詞-た)
- ③ 寒い 寒かった (形容詞-た)

「た」の基本は①であり、②、③については、①の検討結果から捉え直すことができるので、以下では①を中心に検討し、それを「動詞-た」形、または簡単に「た」形、と呼ぶことにする。

なおまた、「動詞-た」形でも、

- ① 降る 降った (-る/-た)
- ④ 書く 書いた (-く/-た)

- ⑤ 読む 読んだ (-む/-だ)

のように同一ではないが、便宜上、④⑤を含む全ての動詞を、①の「る/た」タイプで代表させる。

2. 初級での「た」

先ず、日本語初級の現場では、一般には、「た」形はどのように教えられているのだろうか。

先に述べたように、日本語教育の初級は、一律ではないが、ここでは、初級用の教科書として発行部数が最も多く、また12ヵ国版があって、世界中で使用されている『みんなのほんご』(スリエーネットワーク)から、「た」が取りあげられている課の例文をみてみよう。

『みんなのほんご』では、他の多くの教科書もそうであるように、「です、ます」体の文型で学習するようになっており、1課から「です」文型。そして、4課から「ます」「ました」が登場する。

- ① 私は毎日5時まで働きます。

- ② 私は昨日働きました。

このような「ます/ました」、すなわち「る/た」は、「非過去/過去」に対応している。

次に、7課で、次のような文型が取り上げられる。

- ③ もう荷物を送りました。

欧米系の文法用語を使えば、②の「ました」は「過去」の時制(テンス)を表し、③の「ました」は、「完了」の相(アスペクト)を表している。

同じ教科書を使っても実際の教室での教え方は同じではないだろうが、この教科書では、「過去」や「完了」という語を用いるかどうかは別として、初級の学習者に、過去と完了の区別から「た」の使い方を身につけさせようとする。

ただ、例えば英語では、過去形は went, 完了形は have gone で、逆に went なら過去、have gone なら完了と、動詞形と意味(機能)が対応しているが、次のように4課と7課の文型を並べてみると、

- ④ 昨日送りました。

- ⑤ もう送りました。

と、動詞部分に変化はない。

それぞれを否定する文を作れば、④は「送りませんでした」となり、⑤は「(まだ)送っていません、送りません。」となって違いが分かる。しかし、④と⑤だけを比べると、動詞部分に変化はなく、動作が終わっている点も同じで、ただ「昨日」と「もう」が異なっているだけである。

どんな言語も必要十分な時間表現形式をもっているが、英語などとは違って、時間の表現形式が動詞変化や助動詞付加によらない（動詞が狭義の時制を担わない）言語を母語とする学習者の場合、過去と完了を「昨日」「もう」で見分ける場合も少なくないだろう。

例えば、「明日行く」は「明天去」で「昨日行った」は「昨天去」となる中国語のように、母語に狭義の動詞時制がない学習者は、「昨日」と書けばそれで過去だと示されることから、次のような誤文を書くことが少なくない。

* 昨日買う本を今日読みます。

逆に、狭義の（動詞）時制が厳しい言語を母語とし、いわゆる時制の一致に敏感な学習者は、

* 明日大学で会う時、彼に話します。

といった文を書くことが多い。そして、32 課や 34 課にある、

⑥ 病院へ行った方がいいですよ。

⑦ 朝ごはんを食べたあとで、学校へ来ますか。

といった、未来文の中に過去形と同じ「動詞-た」が使われる文型を身につけるのに苦労するだろう。

ちなみに、『日本語誤用辞典』では、⑥を、次のように書いたインドネシア人学習者が、誤文と指摘されている。（これについては、後（5）で取り上げる）。

なぜですから、病院に行くほうがいいですよ。

なお、25 課から「たら」形が登場する。

雨が降ったら、いきません。

ただ、「はじめに」でも触れたように、「たら」は「た」の活用形としてではなく、文型として扱われるため、これからあと（未来）のことをいうのになぜ過去の「た」が使われるかといった疑問は、「たら」に関しては回避される。

他にも、次のような文型が取り上げられるが、煩瑣になるので、例示するだけに留める。

13 課：疲れました。

19 課：行ったことがあります。

22 課：パリで買った帽子です。

23 課：帰ったとき、「ただいま」といいます。

29 課：本を読んでしまいました。

しかし、実際には、「た」には、初級では取り上げられない用法が非常に多い。学習者が教室から一步出ると、単純な過去や完了では説明し難い、様々な「た」文型に出会う。

3. 「た」はどのような機能を持つのか

3.1 「た」の多義性

国語辞典で助動詞「た」をひくと、それぞれ独自の意味、用法の説明があるが、「過去」を最初に挙げるか「完了」から始めるかは別として、いずれも、過去と完了を、「た」の基本的な意味、機能としている。多くの「た」の研究もまた、「た」を、「過去」と「完了」、あるいは「時制（テンス）」と「相（アスペクト）」という基本的な機能から捉えることを土台にしている。

ただし、「テンス」や「アスペクト」をどう捉え、どう規定するかという研究者の視点に応じて、「た」ひいては日本語の時制表現に対する見方は、当然異なる。「テンス、アスペクト」もまた、西洋文法の枠組みなので、それらを日本語にうまく適応させようとするか、それとも適用を厳しく限定して、日本語には厳密な意味のテンスはない、あるいは完了のアスペクトはない、とするか、結局、「日本語のように時制を認めるか否か議論が定まらない場合がある」（国広、1998）ということになる。

しかし、それだけでなく、「た」のややこしさは、「過去」と「完了」には簡単に分類できない意味、用法が多いことである。

もちろん、「台風で倒れた木」のように、過去あるいは完了した動作の結果や状態を示す用法に、「過去、完了」とは異なる「存続」という語を用いたり、「アメリカには昔行った」のような表現を過去の「経験」としたりするのは、特に問題はない。

しかし、例えば失くした物を見つけた時の「あった！」や、商人の「さあ、買った、買った」などは、簡単な「過去」や「完了」からの派生として説明するのが難しいので、研究世界では、「あった」は「発見」の「た」、「さあ、買った」は「勧誘」「催促」の「た」、あるいはまた、「あなたは1年生でしたね」は「確認」の「た」、「あなたは1年生でしたか」は「認識修正」の「た」などと、項目を立てて分類し位置づけられることが多い。他にも、「想起」の「た」、「仮定」の「た」、「命令」の「た」、「婉曲」の「た」、さらに「反事実」「後悔」「強調」の「た」、さらに「開始」の「た」、「認識改め」の「た」という呼び名もある。

時制（テンス）や相（アスペクト）が、過去形、完了形など、形に対応している英語のような言語とは異なり、日本語の「た」は多くの機能をもたされ、多くの名前を背負わされていることには、歴史的理由がある。

「た」の源は助動詞「たり」であって、「たり」のひとつは、「てあり」から変化し、完了と完了した状態や結果の存続を表す「たり」、もうひとつは「とあり」から来た断定を表す「たり」であるが、その結果、口語の「た」も、基本的にそれらの意味、機能をうけついでいる。しかし、それだけではない。

「風立ちぬ」のような特に意図された文語表現や、「行きつ戻りつ」「結論ありき」などが現代文でも使われるが、現在日本語の学校文法で、過去を表す助動詞とされるのは、「た(だ)」のみである。歴史的には、完了や過去を表す助動詞には、「たり」だけでなく、「き」「けり」「つ」「ぬ」「り」、さらに「けむ」「あり」が、時代にに応じて、それぞれ異なった意味ニュアンスで用いられていた。ところが、それらの語は次々に消えてゆき、現代日本語では、「た」だけが残ったことで、「た」は「助動辞として加重労働をしいられている」(藤井,2010)。現代語の「た」が、消えてしまった他の語の意味、機能を背負われ、「時間に関わる表現の全てを『た』ひとつで押し切るようになってしまった近代、現代語を、便利になったとよこぶべきか、貧しくなったと嘆くべきか」(藤井,2016)、と藤井は問いかける。

多様な機能を背負わされた「た」が、様々に命名されるという事態は、「た」の多様な意味、用法を確認、分類しようという研究書や論文に現れるだけではない。辞書でも、例えば、「ちょっと待った。」「どいた、どいた。」の「た」は「動作の実現を促す」「た」とか、「そこをどいた」「承知しました」「わかった、わかった」は「強い決意・断言や軽い命令」などを表す「た」とか、「雪国であった」は「物事や事態の確認」を表す「た」で「もうやめた」「よし買った」は「決意」の「た」、また「出発は明日でしたね。」「何でしたかね。」という用例は「知っていることの確認・想起」,「あ、バスが来た」の「た」は「以前から心にある物事の実現(想起)」,「待っていたことが実現しつつある」ことを表す「た」,などと、実に多様な説明が列挙される。

もちろん、辞書の利用者としては、多くの意味用法が列挙されていることはありがたい。しかし、日本語の教室で、「探していた物が見つかったときに、どうして『あった!』と過去形でいうのですか」という留学生の質問に対して、「その『た』は過去の『た』ではなく、命令の『た』です。『た』には、そういう用法があるのです」というだけでは、彼ら質問に十分答えたことにはならない

だろう。

例えば、英語の前置詞 on を辞書でひくと、「接触,付着,位置,場所,日時・・・」とたくさんの意味用法が列挙されている。しかし、ある段階の学習者に対して、例えば「何かが別の大きい何かに点または狭い部分で接触しているイメージ」(これが当たっているかどうかは知らないが)を提示することは、少なくとも、学習にとって有効ではないだろうか。

3.2 辞としての「た」

実際に留学生への日本語教育に従事し日本語学に関する著書も多い森田良行は、「た」の本義を、テンスやアスペクトから、はっきりと切り離す(森田,2007)。

「た」を過去のテンスや完了のアスペクトといった「時間」から捉えると、「～『やっぱり火星に衛星ありましたよ』のような、時と関係ない文脈で『た』が現れるのを、どう説明していったらよいだろうか。明らかに過去の事実を表す文での『た』も、今見たような時と関係のない話の『た』も合わせて、統一的に説明できる『た』の意味と機能を解明する必要がある。」(森田,2007)

森田は、時枝文法の「詞」と「辞」の機能区別を踏まえて、次のようにいう。「文表現において、客観的な叙述と主観的な陳述との役割を区別し、後者の叙述判断は、辞である～助動詞によってなされるのが日本語である。」(森田,2001)

「た」は「辞」であり、「時」という客観的な世界に属することは表さない。「過去のことか否かは、叙述内容が決めることで、それに附属した『た』の働きで決まるわけではない。「過去・完了と言われる日本語の助動詞『た』は、命題の中で直接『時』を表しているわけではない。」。「『た』の本義がテンスとは別のところにあるため、過去のことでも『た』の現れないこともあり、また、未来や時と関係のない叙述内容でも、『た』の伴う例が見られるということである。」(森田,2007)

では、その本義がテンスにはないとすれば、「た」という「辞」の働きはどこにあるのだろうか。

過去とか完了とかは「客観的な叙述内容の問題であって、それに対する話者の主観的な認識を添える『た』は、ただそれを個別的な事象として振り返り、間違いなくそのような事実が成立していると判断する。」(森田,2007)。ひとことでいって、「た」は「確述意識を表す」、と森田はいう。

もしかすると、「確認の『た』」、「発見の『た』」、「確信の『た』」など、これまで「特殊用例、拡張用例」とみられてきたものの方が、むしろ「た」の本義に近いのかもしれない。例えば「発見の『た』」にしても、それは、「以前からあった」ものの「発見」という形で過去や完了の派生表現といった関連づけは不用で、端的に、「今、ある」ことを強く「確認して述べる」意識の表現が「あった」である、となろう。

もちろん、「昨日買った本」という。このように、「話中の『時』がたまたま過去である場合には、その事象を振り返って、その成立を確かなものと認識する結果、『回想』の意味合いが『た』に付随することとなる。」(森田, 2001)。いわば、発語者は、客観的に過去の出来事を述べるから「た」をつけるのではなく、「た」をつけることで出来事が、間違いなく成立した、過去の出来事だと表明するのだといえよう。

4. どう教えればいいのか

4.1 日本語教育の中の「た」

森田のように、過去とか完了とかは「客観的な叙述内容の問題であって」、「た」は「それに対する話者の主観的な認識を示す」、すなわち個別的な事象を振り返り、「間違いなくそのような事実が成立していると判断する」機能をもつ「辞」である、と見れば、これまで見てきたような「発見の『た』」や「確認の『た』」などの特殊用例を、「過去、完了」に関連づけようと苦労したりもせずに理解できるかもしれない。「た」に限らず、テンスやアスペクト、ムードといった装置によりかからずに、日本語の文法構造を日本語に即して捉える文法理論が求められるという、最初に触れた寺村秀夫の願いは、今後も続いて行くだらう。また、「た」を辞として、発語者の判断意識の表明と捉える森田の見方は、大変示唆的である。

ただ、『みんなのほんご』で見たとおり、多くの初級教科書では、「た」の学習を単純な過去表現から始め、次に完了表現に進む。それらを時制(テンス)、相(アスペクト)と呼ぶかどうかは別として、「る／た」が、主動詞としては「非過去／過去」に対応することを、「た」理解の入り口としないのは得策ではないだろう。また、歴史的経緯からしても、「た」の本義として、「たり」由来の完了をはずすと、かえって学習者の理解が難しくなるのではないだろうか。

文法研究と文法教育との相互のフィードバック関係

は常に必要不可欠であるが、文法研究と教室での文法説明を、全面的に直結させるということは難しい。

日本語教育では、国語教育におけるような「学校文法」はないが、『みんなのほんご』で見てきたように、多くの初級教科書で、「た」形を過去や完了といった「時間」関連の表現文型として学ぶ。そういう初級学習をしてきた留学生の現状を踏まえながら、中級に移行する段階で、改めて「た」をとりあげ、「た」を列挙主義的な説明ではなく、文法論的な厳密さで細かい区別に係ることなく、理解しやすさを基準に、分かりやすく示すことができないだろうか。

4.2 時の流れと発語の「いま」

ということで、改めて、過去の「た」と完了の「た」からはじめよう。

例えば、倒れそうな木を見ている場合、時系列に状況描写を並べると、発語は次のように経過してゆくだろう。

A: まだ倒れない・・・

いま倒れる・ア・いま倒れた

・・・もう倒れた、倒れている

・・・昨夜倒れた

(最初のところで、「まだ倒れていない」ということももちろん可能だが、煩瑣になるため略す。以下同じ)

起きなさいといわれている私の状況でも、同様である。

まだ起きない・・・

いま起きる・ア・いま起きた

・・・もう起きた、起きている

・・・7時に起きた

他にも、「いま落ちる・いま落ちた」「いま沈む・いま沈んだ」などでも同様の時系列が成り立つ。

ところで、時系列Aでは、木は、「ア」というところで倒れたのだが、「いま」は、倒れる寸前の「いま倒れる!」と直後の「いま倒れた」と、二度いわれる。

いい方を換えれば、Aのような時系列発語では、「いま」という発語は、「る」から「た」に切り替わるという短い時間経過において使われ、そして、切り替わった後は、「いま倒れた」が「もう倒れた」に続いて行く。そして、さらに、時間が経過すると、「昨夜倒れた」となる。

① 「いま倒れた」「もう倒れた」の「倒れた」

上の時系列に並んだ発言を見ると、「いま倒れた」「もう倒れた」や「いま起きた」「もう起きた」という「た」

形は、その発語が、問題となる時間経過のうち、その動詞が表す動作が実際に起こった直後以降の発語であることを示している。当たり前のことをいっていると思われるだろうが、短くとれば、「いま起きる～いま起きた」という瞬間的な時間幅の後半。長くとれば、「まだ起きない～もう起きた」の後半。それを示すのが、「た」という指標である。後者を疑問と否定にすれば、「もう起きた？まだ起きない」となる。

もうひとつ、時系列の終わりにも「昨夜倒れた」「7時に起きた」という「た」形がある。

② 「昨夜倒れた」の「倒れた」

これは、瞬間的な「いま」の出来事を、後から振り返っての発語である。この場合には、①のように、「倒れる」という動作が「まだ～もう」のどこに位置するか、つまり「まだ倒れないか～もう倒れたか」といったことではなく、昨夜を振り返って、「倒れたか／倒れなかったか」を問題にしている。

① 「いま倒れた」「もう倒れた」の「倒れた」

② 「昨夜倒れた」の「倒れた」

①の「た」を「完了」、後者②の「た」を「過去」、と名付けたり、テンスとアスペクトという語を使って分析し説明したりするかどうかは別として、あるいはそういった用語を使わなくても、「た」形は、①のようにも②のようにも用いられることは、学習者にも理解できるだろう。

4.3 「いま」のひろがり

ところで、いま見た動詞では、「いま倒れる・ア・いま倒れた」というように、動作は瞬間的に起こるが、しかし、そうではない場合もある。

例えば、ゲームをやめて早くおやつを食べなさいといわれている子どもの状況描写を、同様に時系列に並べてみよう。

B: まだ食べない・・・

いま食べる・いま食べている・いま**食べた**

・・・もう**食べた**

・・・さっき**食べた**

公園で「走る」、手紙を「書く」、本を「読む」なども同様な時系列が作れる。

さて、AとBを比べてみよう。

「倒れた」と「食べた」の位置は同じである。

しかし、「倒れている」と「食べている」の位置は違っている。

Aでは、「いま倒れる・・・いま倒れた」の間には、「ア」という瞬間しかないが、Bでは、「いま食べる・・・いま食べた」の間に、「いま食べている」という途中の時間経過が挟まっている。仮に、Aのような時系列になる「倒れる」「起きる」「沈む」のような動詞を、便宜上瞬間動詞と名付け、Bのように「食べる」「走る」「眠る」のような動詞を、継続動詞と名付けておくと、瞬間動詞では、「台風で倒れた木に気を付けてください」と「倒れている木に気を付けてください」と、似た意味で使われるが、継続動詞の場合には、「公園で走っている」という「ている」形は、「いま」の状況で使われる。

ただし、瞬間とか継続といっても、あくまでも発語者の意識による。普通は瞬間的な「落ちる」でも、「いま宇宙船は地球に向かって落ちています」などということもあるだろうし、逆に普通は継続的な「走る」でも、マラソン出場をひとまとめにして、「彼は前回の大会でも走っていますね」「ええ、走りました」というようにも使われる。

さて、瞬間動詞は、「倒れる」「落ちる」のように、瞬間的に状況が変化するできごとを表すが、「ない」が「ある」に瞬間的に変化する場合も、それに準拠して捉えられないだろうか。

まだ分からない・・・

ア・いま**分かった**

・・・もう**分かった**

同様に、

まだない・・・

ア・いま**あった**

・・・もう**あった**

動詞の分類をもっと詳しく検討した方がいいのかもしれないし、国広哲弥（1967）以来多くの研究者が研究してきた、いわゆる「発見」の「た」などをこれで説明しきれるとはいわれないが、少なくとも学習者には、「ア、分かった」や「ア、あった」が、日本語として多く使われるということを了解してもらいやすいのではないだろうか。「バスが来た」も、「期待実現」の「た」などと別名称を立てる必要があるのかどうか。（それについては後に触れる。）

5. 「いま・ここ」の移動

5.1 発語の「いま・ここ」

上にみたように、発語の「いま」は、既に、客観的な今時刻ではない。上に述べた「瞬間動詞」でさえ、「い

ま落ちる・ア・いま落ちた」と、瞬間の前後に「いま」の幅がある。

発語の「いま」が客観的な時間とは別の幅をもつことは、日常的に絶えず起こる。「昔と違って、いまはコンビニで買えますからね」とか「いまは地球上に酸素があります」などと。

幅だけではない。

発語の「いま、ここ」は、客観的な現在の瞬間から、自由に移動する。

小説や歴史書の、いわゆる「歴史的現在」だけでなく、日常的な談話でも、客観的には過去のできごとを語る際に、発語者の意識がその時点に移動して、現在形で話すことがある。

「昨日テレビで市民マラソン見てると、知った顔のランナーが走って来んです。あれ、と思ったら、それが山田さんなんですよ。」などと。

5.2 移動する「いま」

既に見たように、日本語の「時制」が不完全だ、あるいは時制はない、などとされる時、次のような例文がよく引かれる。

明日会った時彼に話します。

実際に、留学生の作文では、

明日会う時彼に話します。

といった文をよく見かける。誤文と断定はできないかもしれないが、日本語話者なら、「会った時」というだろう。

もっとはっきりした例文では、

明日、朝買った本を夕方までに読むつもりだ。

の「買った」は「買う」にはならない。

このように、未来の行動や動作に、過去と同じ「た」形が使われることについては、「相対的現在」などという語で説明される。

つまり、主文の動詞では、「た」は過去であり、「昨日、本を買った。」の「買った」は、客観的な過去の動作であるが、

買った本を、明日の昼に彼に渡す。

では、「買った」のは昨日か明日の朝か、しかし明日の夜ではない。つまり、「買った」の「た」は、主動詞である「彼に渡す」時点より相対的に以前であることを示している。いいかえれば、「彼に渡す」時点が、客観的な現在（絶対現在）とは異なる「相対的現在」になっているというわけである。

このことについても、「絶対現在」と「相対現在」な

どと難しくいわずに、日本語発語者の意識において、「いま」の幅が発語に応じて拡がるように、「いま、ここ」が発語に応じて移動する、という説明はどうだろうか。

買った本を彼に明日あげる。

という時、発語者である私の意識の「いま、ここ」は、「彼にあげる」場面に移動している。私にとって、購入行動は、「彼にあげるいま」より「以前のできごと」である。そこで、「買う」ではなく「買った」となるのであろう。

5.3 想起の「いま」

同様に、例えば、「そのバッグはどこで買ったのですか?」と聞かれて、私の回想意識は買った「とき、ところ」に移動する。

そして私は、例えば次のどちらかをいう。

① このバッグは、中国へ行った時に、空港で買いました。

② このバッグは、中国へ行く時に、空港で買いました。

発語者である私は、「バッグを空港で買った」ということをいいたい。その時、私の回想意識は、「買った」時点の「いま・ここ」に移動すると考えればどうだろうか。

①では、私は北京空港の情景を思い出し、それは飛行機で「行った」後なので、「行った時買った」といい、②では、出発前の関西空港を思い出して、「行く時買った」が選ばれる。

「あ、バスが来た」はどうだろうか。

例えば、バス停で、子供を連れてバスを待っている女性を想像してみよう。彼女の意識はずっと遠くに移動していて、バスが見えると戻ってくる。

「あ、バスが来た…もうすぐ来るよ…来た、乗りましょう。」

子供に対する発語は、「来た」→「来る」→「来た」と変化する。日本語では、「is coming」とか「has come」とかいった形は取らずに、「来る」「来た」とだけしかいわないが、「来た・来る・来た」という変化で、発語者である彼女は、状況を的確に子供に伝える。子供もまた、彼女のことばの背景となっている、遠くの地点からバス停へと切り替わった、発語の「いまここ」の移動を理解して、混乱することはない。

このような説明が文法議論になっているかどうかは別として、少なくとも学習者に対しては、日本語の「テンス」は不十分だといったり、わざわざ「期待実現」の「た」といった項目を立てたりするよりも、分かってもらいやすいのではないだろうか。

5.4 関心の「いま」

『みんなのほんご』の27課,32課に,次のような例文がある。

- ① どこにごみを出したらいいですか。
- ② 病院へ行った方がいいですよ。

『日本語誤用辞典』には,インドネシア人学習者が書いた次の文を誤文として,正文に直している。

- ③誤文:かぜですから,病院に行くほうがいいですよ。
- ④正文:風邪ですから,病院に行ったほうがいいですよ。

辞典では,未来の行動であるにもかかわらず,「行った」と訂正される。そして,「話し手の気持ちが強く入る時」には「-る」が「-た」となり,この場合には「助言」の気持ちが強く入った文だからと説明される。

しかし,気持ちが強くなくても「た」は使うだろう。「その程度なら私なら病院には行かないけど,行ったほうが安心ならそれでもいいかも」,などと。

漱石も「もう行く方がいいだろう」(『野分』)と書いているから③も誤文ではない,などとはいわない。小島政二郎が,「想像せずにいられなかった」,「彷彿とせずにいられない」と書いている(『小説永井荷風』)からといって,日本語の教室で「毎日ゲームをせずにいられません」と書けば誤文である。また,「-たほうがいい」という文型を定着させるために,「-るほうがいい」は伏せておく,ということなら理解はできる。しかし,ここでも学習者は,「気持ちが強く入る時」には「た」というように,新項目で覚えねばならないのだろうか。

①インフルだと大変だから,病院に行ったほうがいいよ。と友人にいうとき,友人と私の気持ちは,インフルで大変にならないだろうかと,病院に行く「後」の想像点に移動している。そして私は,「行った」後の方が,「行かなかった」後よりもいいのではないかと,助言している。

行く後のことではなく行く今を想像している場合には,「私はお母さんと行くほうがいい!」,などと「気持ちを強く入れて」いっても,誤文ではないだろう。

6. まとめ

以上,「た」の基本とされている完了と過去といわれる用法を,発語の時系列で整理した上で,「た」が入っているが,単純に「過去」や「完了」やその「存続」では説明し難く,「～の『た』」などと命名されて議論さ

れてきた用法について,列挙主義ではない,学習者により分かりやすい説明を考えてきた。

発語の「いま・ここ」は,時系列に従って順次移動する,発語の「いま・ここ」は,「瞬間的な現在・身体的な現地点」ではない。ということは当然のこととして,「た」形に注目すれば,発語の「いま」は,話題に応じて,幅が広がる。

発語の「いま」は,注意や想像や回想など,意識のありように応じて,移動する。

もちろんこれも当然のこととはいえるが,発語の「いま」の移動に注目することで,多くの「○○の『た』」といったものを立てなくても,学習者に説明できるのではないだろうか。

文法理論としてこちらの方がよいとはいわない。より厳密な検討には,「発見の『た』」と命名して区別することも必要だろう。けれども,留学生たちは,日本語は初心者でも,他のことについては知的水準も,知的好奇心も高い。「探していた物を見つけたとき,なぜ『あった』というのですか」と質問されて,「それは過去や完了の『た』ではなく,発見の『た』です。日本語では,そういう時に『た』を使うのです」と答えるだけでは,納得してもらえないだろう。「なぜ,『今』の発見なのに,『昔ここにお城があった』と同じ『あった』なのですか」という問いには答えていないからである。

日本語教育の教室には,様々な言語を母語とする学生が混在する。それぞれの母語を習得することは,例えば時間をどのように言語化するかという基礎的な枠組みを身に付けることであり,外国語としての日本語は,その枠組みの制約を受けながら,母語とは異なる枠組みをもった第二,第三言語として学習されてゆく。英語圏の留学生なら,「来る／来た」は「**come / came**」と同じ変化だとすぐ理解し,でも「**I see.**」とか「**I understand.**」を「分かった」「分かりました」といい,「**Here, it is**」を「ここにあった」,「**Spring has come**」を「春が来た」,というような表現を身につけるのに手間取るかもしれない。当然また,英語などとは違って動詞変化に頼らない時間表現形式をもつ言語,例えば中国語やタイ語,を母語とする留学生は,英語圏の学生とは別のところで,日本語と母語の時間表現形式を比較しながら,日本語を学んで行くだろう。

「言語はいずれも,～時間表現の普遍をそれぞれ固有の方法で特殊化し,多種多様な時間表現を作り

上げている。」(金子,1995)。日本語を学ぶことは、日本語の、ひいては日本語文化の時間意識を学ぶことでもある。日本語の文法研究と、欧米系だけでなく他の様々な言語の文法との比較研究の広がりを受けて、学習者がそれぞれの母語と日本語の間の文法構造や、時間的な事態を述べる枠組みの相違に配慮しながら、分かりやすい説明を工夫してゆくことが日本語教員に求められる。

今後の課題として、本稿で論じた「た」の意味用法とその教え方について研究を進め、教材開発につなげてゆきたい。

引用・参考文献

- 1) 庵功雄,高梨信乃,中西久美子,山田敏弘 2008 『日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク (pp.40-53)
- 2) 伊坂淳一 1997 『ここからはじまる日本語学』 ひつじ書房 (pp.127-137)
- 3) 市川保子 2005 『初級日本語文法と教え方のポイント』 スリーエーネットワーク
- 4) 市川保子 (編著) 2010 『日本語誤用辞典』 スリーエーネットワーク
- 5) 井上和子 (編) 1989 『日本文法小事典』 大修館書店
- 6) 加藤重広 2006 『日本語文法入門ハンドブック』 研究社 (pp.044-053)
- 7) 金子亨 1995 『言語の時間表現』 ひつじ研究叢書 (p.15)
- 8) 国広哲弥 1984 「「時制」解説」 『小学館日本大百科全書 (ニッポニカ)』 小学館
- 9) 国広哲弥 1967 『日英両語対照研究』 三省堂
- 10) 小林亜希子 (島根大学) 2009 「日本語可能文における「発見のタ」と格標示」 『第 285 回 8, 島言語文化談話会 (2009/08/01) (於:広島大学西条キャンパス)』 (pp.1-12)
- 11) 小林典子 2001 「複文から単へ」 野田尚史, 迫田久美子, 渋谷勝己, 小林典子 『日本語学習者の文法習得』 大修館書店 (pp.165-166)
- 12) 小池清治, 小林賢次, 細川英雄, 山口佳也 (編集者) 2002 『日本語表現・文型事典』 朝倉書店
- 13) スリーエーネットワーク 1998 『みんなの日本語 初級I・II』 スリーエーネットワーク
- 14) 帖佐幸樹・白川博之 2016 「いわゆる〈発見〉の「タ」に関わる考察—「スル」形と「シタ」形の使用に着目して—」 『広島大学日本語教育研究, 広島大学日本語教育研究 (26) 広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座』 (pp.41-17)
- 15) 寺村秀夫 1973 「テンス・アスペクト・ボイス」 『国語シリーズ別冊 2 日本語教育 (文法編)』 文化庁 (pp.119-150)
- 16) 寺村秀雄著 1984 『日本語のシンタクスと意味II』 黒潮出版 (pp.75-216)
- 17) 時枝誠記 1950 『日本文法』 岩波書店
- 18) 長友文子 2015 「『外国語としての日本語』 クラスで『-た』をどう教えるか」 『IER 年報』 和歌山大学国際教育研究センター第 11 号 (pp.75-84)
- 19) 西山淳子 2009 「英語と日本語の過去形の語用論」 『立命館言語文化研究 21 巻 2 号』 (pp.169-181)
- 20) 藤井貞和 2010 『日本語と時間<時の文法>をたどる』 岩波書店
- 21) 藤井貞和 2016 『日本文法大家』 ちくま新書
- 22) 村松由起子 1991 「所謂「発見」「確認」「想起」の「タ」考」 『名古屋大学人文科学研究 20』 (pp.39-50)
- 23) 森田良行 2007 『助詞・助動詞の辞典』 東京堂出版, (pp.101-102)
- 24) 論集委員会 2004 「日本語教育の視点」 『国際基督教大学院教授 飛田良文博士退任記念』 東京堂出版

引用辞書

- 1) 『広辞苑』 岩波書店
- 2) 『大辞林』 三省堂
- 3) 『日本文法大辞典』 明治書院
- 4) 『日本語教育辞典』 大修館書店
- 5) 『明鏡国語辞典』 大修館書店